

## 59. 発達障害のある乳幼児期から成人期までの 相談支援に役立つアセスメントの研究と普及

草羽俊之（広島市立広島特別支援学校）

### 1. 目的

2006年に障害者自立支援法が2007年には特別支援教育が始まり、乳幼児から成人期以降までの切れ目のない支援の継続を大きなテーマと掲げられている。障害のある人に対して、ライフステージごとで個々に応じた様々な支援がなされるよう「教育」「福祉」「医療」「労働」等の各分野が連携をとった支援を行うことが言われている。特に具体的な支援に結びつけるための各関係機関でのアセスメントは重要な意味を持っている。

この研究は、広島市における療育機関、特別支援教育諸学校、就労支援施設で相談・支援を担当するコーディネーターや専門家が、乳幼児から成人までの一貫した支援の継続を支えるためのアセスメントに必要な発達検査や診断方法の技術を習得し、実際に各現場で発達検査を行い、その事例の検査結果をもとに分析・評価の検討を行うことで、その後の相談・支援や実践に活用することを目的としている。

### 2. 方法と内容

新版K式発達検査（以下K式発達検査とする）の研修会を通して検査法の習得をすると共に実際に検査を行い、事例検討を通して分析・評価を行う。

- (1) 生活年齢の違うライフステージにおける就学前療育施設、小学校・中学校、特別支援学校（小・中・高）、就労支援施設の専門家や支援者（保育師・教師・作業所指導員）がK式発達検査による検査法について研修を行い、検査技術の向上を図る。
- (2) 参加者がお互いのK式発達検査の事例を持ち寄り、検討する中でアセスメントの仕方や分析・評価方法について研究協議を行い、実践に繋げる仮説の立て方などの力量と専門性を高める。
- (3) K式発達検査による研修会と事例検討のビデオ収録によるDVD編集を行い、アセスメントと相談支援における専門性の向上のための貸し出しを行う。
- (4) K式検査研修会は20名の構成による6回の研修会に通年での参加を原則とした。

### 3. 結果及び考察

#### (1) 結果

K式発達検査の研修会への参加と検査技術の習得。

6回の研修会への参加者（定員20名/1回）の延べ人数は105名であった。研修会参加者のうち小学校1名、中学校2名、特別支援学校2名の教諭がK式発達検査を活用して、児童・生徒の計17名のアセスメントを行うことができた。（資料1参照）研修会の事例検討会による分析・評価を行うことを通して専門性の向上につながった。

事例検討は、8事例について検査結果及び検査中のビデオ録画の視聴と、ケース実態がわかる資料（家族構成、生育歴と相談歴、生活習慣、学習、趣味や嗜好、癖やこだわり、対人関係、行動特徴等）による分析・評価を行った。（資料2参照）

DVD「新版K式発達検査方法及び分析・評価」の編集とK式検査器の購入と貸し出し。

K式発達検査の習得から事例検討までの一連の研修会の内容について編集をしたDVD「新版K式発達検査方法及び分析・評価」を制作した。個々の参加者の学習の継続及び希望者への貸出を行った。また、併せて新版K式発達検査器の貸し出しも行い、各学校・施設等でのDVDによるK式発達検査の研修活用としての提供を行っている。

## (2) 考察

ライフサイクルを見通したアセスメントと継続した支援の共通理解(資料1参照)

特別支援教育や障害者自立支援法では、乳幼児から青年・成人期に至るまでの支援の継続が言われている。この研修会では知的障害や発達障害の対象領域でライフステージの違う場で支援を行っている者同士が支援の継続をはかるためにK式発達検査を学び、それを活用し、分析・評価・活用までの事例検討を行った。このことはお互いの対象領域を超えてライフサイクルを見通したアセスメントを研究する場として大きな意義があった。

事例検討を通して分析・評価方法の理解と検査者の観察力の視点の整理(資料2参照)

各自が現場で行ったK式検査の結果を持ち寄り、検査中のビデオ視聴を通じた事例検討では、検査技術を向上させただけでなく、集団的な検討により確かな分析・評価につなげる力量を高める研修にもなった。更には、その分析・評価は個別の支援計画や個別の指導計画へも反映させることができた。

また、事例検討を進める中で、検査時の被験者を観察する視点と反応の様子について、検査の数値結果をより有効な分析へとつなげるために、注意深く観察するポイントを共通化するために、次のように整理することができた。

「検査時の態度」「検査者との関係の取り方」「ことばの遣い方」「体、手指の動き、目の動き」「表情、つぶやき等も観察」「出来、不出来の反応」「同席者(担当者)の意識の仕方」

事例検討会の継続的な取組の必要性の課題

今回の事例検討会では、できなかった乳幼児期と成人期のアセスメントと、更に各人の検査技量及び分析・評価の専門性の向上を考えると今後も継続した研究や研修の機会を保障する事が求められている。

## 4. 経費

経費使途明細	助成金額	500,000円
使 途	金 額	
講師謝礼金(6回の研修会と1回の講演会の講師料)	230,000円	
旅費(編集会議費及び旅費:萩市)	20,000円	
新版K式発達検査一式購入費(送料込み)検査手引き書	190,800円	
検査実技・事例検討のDV作成費(DVD・テープ等)	38,650円	
雑費(郵送費,事務費等)	20,550円	
合 計	500,000円	

【資料1】研修計画

期 日	講師・発表者	内 容
第1回 2008年 6月21日(土)	講師 石橋剛先生	講義1 『発達検査の基本的な知識と概要』 ・新版K式発達検査の紹介と検査法の概要 ・発達・教育相談への活用を通して
第2回 7月26日(土)	講師 石橋剛先生	講義2 『2～3歳児の発達検査法と分析』 ・2～3歳の発達段階と子どもの特徴と大切にしたい視点
第3回 8月23日(土)	講師 石橋剛先生	講義3 『5歳児の発達検査法と分析』 ・5歳児段階の検査と分析・評価について ・検査結果から発達診断及び相談について
第4回 10月25日(土)	講師 石橋剛先生 発表者 草羽俊之教諭	講義4 『9・10歳児の発達検査法と分析』 ・9・10歳の節を越えるために子どもの発達を支援する重要性について 研究1 『事例検討会』 ・特別支援学校(高等部)の事例発表・検討 「重度の自閉症と軽度発達障害児の発達検査の評価・分析について」
【講演会】 10月26日(日)	講師 石橋剛先生	『講演会』「萩から発信する特別支援教育」 ～25年間の教育相談活動から学ぶ～
第5回 12月23日(火)	講師 石橋剛先生 発表者 谷田三枝子教諭	研究2 『事例検討会』 ・中学校(特別支援学級)の事例発表・検討 「中度の知的障害児の進学と自立に向けた課題がある事例」
第6回 2009年 2月14日(土)	講師 石橋剛先生 発表者 角谷恵美教諭	研究3 『事例検討会』 ・小学校(特別支援学級)の事例発表・検討 「中度の知的障害児の記憶に課題がある事例」
第7回 3月14日(土) 於：萩総合支援学校	講師 石橋剛先生 発表者 幅野勇生教諭 (全員)	研究4 『事例検討会とまとめ』 ・中学校(特別支援学級)の事例発表・検討 「軽度の発達障害児のコミュニケーションと考える行動する力に課題を抱える事例」 ・研修会全般を通しての講評と参加者の感想

【資料2】事例検討による分析・評価について(生活年齢が同程度の3名を抽出して掲載)

K式検査法は新生児から成人までを検査対象と考えて標準化されており、328項目の検査項目で構成されている。

検査項目の領域は3領域に分かれており「姿勢・運動領域」、非言語性の検査項目(P)として「言語・社会領域」、言語性の検査項目(V)として「認知・適応領域」が6枚の検査用紙に発達年齢に沿って領域ごとに検査項目が配置されている。

検査項目の課題に対する評価は、検査者が被験者の反応の様子を記録と手引き書の判定基準に沿って評価を行い、検査項目ごとに合格は通過(+)、不合格は不通過(-)で検査

用紙に記されて、領域ごとの相対的な進みや遅れが表される。そして検査用紙に通過・不通過の境目が示されることで、被験者のプロフィールが視覚的に把握できるようになっている。

尚、今回の3事例の検査共、姿勢・運動障害はなく、評価はいずれも通過となっている。

事例検討では、その検査結果と検査時の録画ビデオの視聴による分析・評価を行った。

また、各検査項目内容、検査用紙については新版K式発達検査2001の実施手引書を参考にしていただきたい。(京都国際社会福祉センター)

《事例1》視覚優位の軽度の自閉症タイプのケース。

名前	A	生活年齢	16年4月	換算	197月
領域別		得点		発達年齢	発達指数
姿勢・運動	P-M	84		*	*
認知・適応	C A	482		106	71
言語・社会	L S	387		99	66
3領域合計		953		*	*
全領域		953		101	68

(結果)総合的な発達年齢は8歳5ヶ月である。検査用紙に記入された通過結果から見ると10歳から11歳超の課題を通過した項目もあれば、5歳超の課題の項目でつまずいたところもある。全体的に8歳超から9・10歳前後の課題の項目までが通過となった。

認知・適応領域の項目では6歳6月の「釣り合いばかり」が通過していない。9歳超では「模様構成2」「記憶玉つなぎ」「積み木たたき」や10歳超の図形記憶は通過である。しかし9歳超の「財布探し1」は通過をしなかった。

言語・社会領域の項目では5歳超の「語の定義」が不通過であった。その後の6歳6月超の「語の差異」も不通過となっている。また6歳6月の「短文復唱2」も不通過であったが、次の課題の8歳超の「4数逆唱」は通過している。そして、10歳超の「数列」、11歳超の「閉ざされた箱」「60語列挙」は通過している。

(分析・評価)

相手の話(説明)を聞いて答える力、他者からの情報を取り込む力が弱い。ことばをイメージする力は弱い、視覚的に入る問題や系列化された問題には強い。また、発達レベルの高い課題でも機械的に対応をする内容の問題には、場の状況やイメージを働かせて様子をつかんだりして答えていく力も持っている。このことは閉ざされた箱や60語列挙が通過していることから伺える。

《事例2》中度の知的障害がある自閉症のケース

名前	B	生活年齢	16年0月	換算	192月
領域別		得点		発達年齢	発達指数
姿勢・運動	P-M	84		*	*
認知・適応	C A	352		65	42
言語・社会	L S	227		65	42
3領域合計		663		*	*
全領域		663		65	42

(結果)総合的な発達年齢は5歳5ヶ月である。検査用紙に記入された通過結果から見ると3歳6月超の項目でのつまずきから6歳6月超の項目を通過するところもあり、課題項目により通過・不通過が顕著にでている。

認知・行動領域の項目では3歳6月の「重さの比較(例前)」「積み木たたき」は不通過であるが6歳超の「模様構成1」、6歳6月の「菱形模写」は通過している。

言語・社会領域の項目では、2歳6月の「年齢」3歳越えの「了解1」は通過したが4歳超の「了解2」は不通過であった。一方5歳超の「5以下の加算」「数選び」5歳6月超の「13の丸の理解」「左右弁別」は通過であった。

(分析・評価)3歳6月から6歳6月までの発達の幅を持っている。特に遅れのあるところは言葉で答える問題に弱い。しかし図形や形・色・数のイメージが経験の中で豊富なものについての問題には高い解答率を示している。質問者との人間関係の作られ方により言葉の理解や、答えの反応に影響を及ぼす場合もある。検査中の様子から聴覚過敏がある。

《事例3》発達年齢が9・10歳が壁となる軽度の知的障害のケース

名前	C	生活年齢	16年6月	換算	200月
	領域別	得点	発達年齢		発達指数
	姿勢・運動 P-M	84	*		*
	認知・適応 C A	482	114		59
	言語・社会 L S	387	120		62
	3領域合計	953	*		*
	全領域	953	117		60

(結果)総合的な発達年齢は9歳9ヶ月である。検査用紙に記入された通過結果から見ると6歳6月超の課題が不通過の項目があり、14歳超の項目を通過しているところもある。平均的には9歳前後の項目のところが課題となっている。

認知適応領域の項目では6歳6月超の「釣り合いばかり1」は不通過となっているが、9歳超の「模様構成」「記憶玉つなぎ」は通過である。「積み木たたき」については14歳超の項目まで通過をしている。しかし9歳超の「図形記憶」は通過であるが、「財布探し1」は不通過である。言語・社会領域の項目では14歳超の「7数復唱」「5数逆唱」を通過しており11歳超の「閉ざされた箱」も通過である。8歳超の「日時」「書き取り」は通過であるが「語の類似」については微妙な判定となった。そして9歳超の「理解1」や10歳超の「反対語」については不通過となっている。

(分析・評価)語彙力が乏しく表現をする力が弱い、系列化された問題には強い。長文問題になると意味の把握が弱く、回答を引き出すことが難しくなる。試行錯誤することで途中から見通しを立てて問題を解いていく力はあるが、最初に見通しを立てて問題解決する力が弱い。検査中の態度から全体的に自信のなさが伺える行動や表現があり、自己肯定感や自分を表出することの弱さが伺える。